

ライトニングトークとパブでの立食パーティーによる
コラボレーション促進の試み（2）

Promoting collaboration through lightning talks and buffet parties in pubs

有元よしの*1 岡本真*2 大向一輝*3
Yoshino Arimoto Maokoto Okamoto Ikki Ohmukai

*1 筑波大学*2 アカデミック・リソース・ガイド株式会社 *3 国立情報学研究所

*1University of Tsukuba Academic Resource Guide Inc. National Institute of Informatics

ARG Cafe and ARG Fest are quarterly networking meetings aiming at promoting collaboration among participants. In this article, we discuss the change of , and problems of ARG Cafe and Fest.

1. はじめに

ARG カフェ&ARG フェストとは、業種、職種、専門といったバックグラウンドが異なる未知の人々が出会う場を創り出し、出会った人々同士のコラボレーションを促進することを企図している。ARG カフェ、ARG フェストは、表1に示すように、2008年7月から3ヶ月ごとに全国各地で開催している。

表1 ARG カフェ&ARG フェストの開催履歴

	開催場所	開催日時	参加者数
第1回	東京	2008-07-12	約60名
第2回	横浜	2008-11-28	約70名
第3回	京都	2009-02-21	約50名
第4回	仙台	2009-06-20	約50名
第5回	大阪	2009-08-24	約50名
第6回	横浜	2009-11-12	約70名
第7回	筑波	2010-02-13	約50名
第8回	那覇	2010-06-19	約30名
第9回	京都	2010-09-19	約40名
第10回	横浜	2010-11-23	約30名
第11回	宮古島	2011-02-06	約20名

ARG カフェ&ARG フェストは、2部構成をとっており、第1部のARGカフェでは、約10名の参加者がライトニングトークと称する5分間のショートスピーチを行う。第2部のARGフェストでは、会場をイギリスの伝統的な酒場であるパブ(Pub: Public House)に移して立食形式での懇談を行う。

本論文では、第1報である「ライトニングトークとパブでの立食パーティーによるコラボレーション促進の試み」[岡本 2010]以降の成果について報告する。

2. ARG カフェ&ARG フェストにおける新たな取り組み

2.1 ARG カフェ&ARG フェストにおける問題

ARG カフェ&ARG フェストは、イベントを7回行った時点で、

連絡先: 有元よしの, 筑波大学, 茨城県つくば市 1-2,
yoshino@klis.tsukuba.ac.jp

2つの問題が明確になった。1つは発表内容の偏りである。図1に示すように、すべての回のライトニングトークの演題で、図書館や司書といった、図書館を連想させる用語が入っており、うち第4回、第6回、第7回は、半数近くの演題が図書館を連想させるものであった。また、発表者の肩書きに着目すると、図2のように、ほぼ全ての回で、図書館関係者の発表が行われている傾向があった。

2つ目は、リピーターの増加である。回を重ねたことで、複数回ARGカフェ&ARGフェストに参加したという参加者が多く見られた。そのため、既に知り合いである参加者同士が交流している場面が多く見られた。

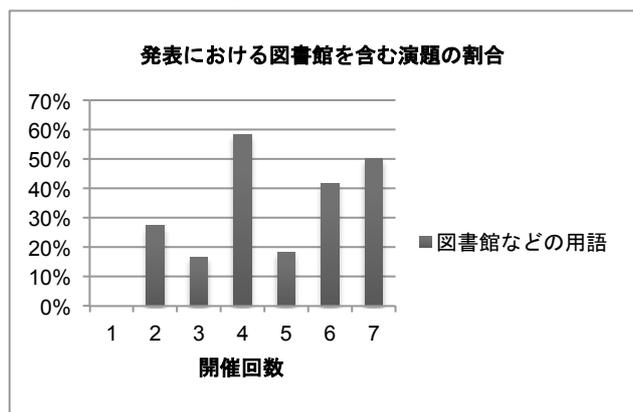


図1 図書館に関連する演題数の変遷(第7回まで)

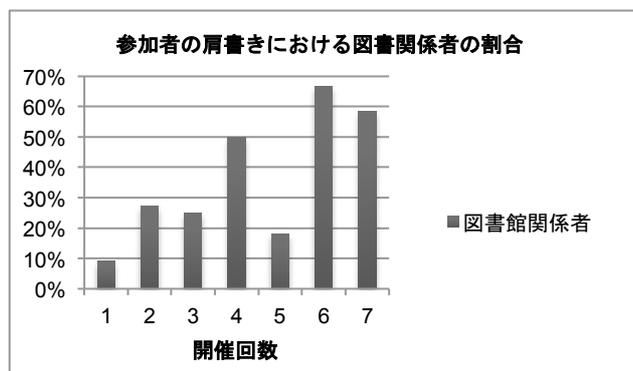


図2 図書館関係者による発表数の変遷(第7回まで)

2.2 ARG カフェ&ARG フェストの変更点

上記の問題を踏まえて、第8回以降のARGカフェ&ARGフェストでは、3つの取り組みを行った。1つ目は遠隔地で

の開催である。第1回から第7回までは、その全てが関東近郊あるいは関西地区での開催であったが、第8回・第11回では遠隔地での開催を試みた。これまで ARG カフェ& ARG フェストを開催していない地域で開催することで、新たな参加者層を呼び込むことを目的とした。

2つ目は、発表者の指名制である。第9回・第10回では、ライトニングトーク登壇者の半数以上を過去の登壇者からの指名制にすることで、新たな参加者の呼び込みを行った。推薦によって発表者を募ることで、スピーカーに多様性を持たせることを目的とした。

3つ目は、Ustream によるライブ中継と、Twitter によるテキスト中継の実施である。ARG カフェ& ARG フェストにおける情報を外部に発信することで、交流だけでなく情報発信の意味を持たせることとした。

第8回以降は、以上3つの取り組みを新たに行った。

3. ARG カフェ& ARG フェストの成果と課題

3.1 ARG カフェ& ARG フェストの成果

以上の取り組みにより、当初の課題として挙がっていた演題の偏り、リピーターの増加を解消することができた。図3に示すように、図書館に関する用語を含む演題は、第8回では8発表中2発表、第9回では14発表中4発表、第10回では12発表中5発表、第11回では8発表中2発表に減少した。図4のように、図書館関係者による発表についても同様の傾向が見られた。

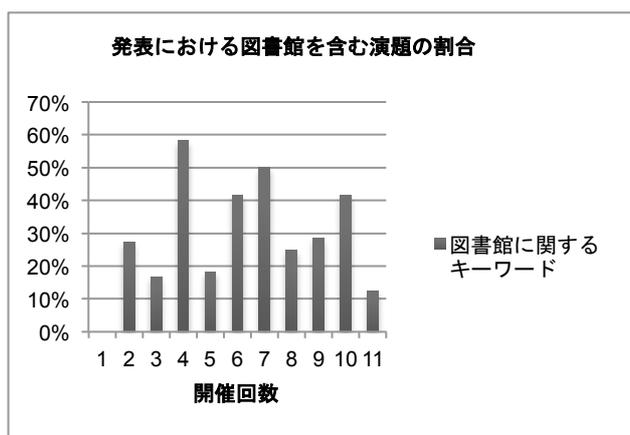


図3 図書館に関連する演題数の変遷(第11回まで)

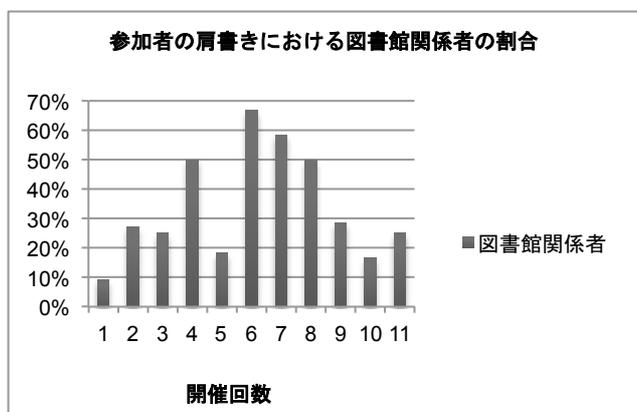


図4 図書館関係者による発表数の変遷(第11回まで)

また、指名制を導入した第9回・第10回では、約半数が ARG カフェ& ARG フェストに参加するのが初めてであるという結果であった。以下に第10回でのライトニングトークの登壇者と演題を示す。下線を引いた演題が指名制によるものである。

- 神田将和 (埼玉医科大学)
「最近の遺伝子検査・遺伝子テストについて思うこと」
- 柴田栄子
「大学院生のための世間フィールドワークのすすめー渡る世間で自分を活かせ」
- バゼル山本登紀子 (ハワイ大学マノア校)
「Unlock the damn door!!!」
- 松本明日香 (筑波大学大学院人文社会科学研究所、日本学術振興会特別研究員)
「歴史と未来の作り方ー米国大統領図書館見聞録/The Making of History into the Future: the US Presidential Libraries」
- 坪井昭訓 (岡山理科大学図書館)
「桜塚やっくん風 大学図書館の紹介」
- 大向一輝 (国立情報学研究所)
「NACSIS-CAT API」
- 山田薫 (楽天技術研究所)
「企業研究者への愛ー研究支援のおしごと」
- 岡野裕行 (法政大学兼任講師)
「図書館のできごと・図書館員の気持ち」
- 山本妃 (ノートルダム清心女子大学)
「Twitter 発図書館ツアー」
- 小篠景子 (としょかん 1300 手観音プロジェクト)
「いつもより「手」広く答えてみました！ーとしょかん 1300 手観音プロジェクトの報告」
- 小林巖生 (横浜 LOD プロジェクト)
地域情報にほどよいセマンティクスを。LOD などいかがでしょう？」
- 折田明子 (慶應義塾大学)
「紀貫之は「まとめ人？」ー平安時代のソーシャルメディア」

このように、指名制を導入したことで、演題の多様性が高まった。

また、Ustream や Twitter による中継の導入は、交流を目的としない参加者等が直接現地に来なくてもライトニングトークの内容を知ることのできる仕掛けとして機能した。Ustream の中継の視聴者のほとんどが過去の参加者であった。

3.2 ARG カフェ& ARG フェストの課題

これまで述べてきたように、様々な仕掛けを行うことで、演題者の偏り、リピーターの増加といった問題の解決が見られた。今後は、更なるコラボレーション促進のための新たな仕掛けと、それを実現できるような場の設計について考察する必要があると思われる。

参考文献

- [岡本 2010] 岡本真, 大向一輝, ライトニングトークとパブでの立食パーティーによるコラボレーション促進の試み
<https://kaigi.org/jsai/webprogram/2010/pdf/136.pdf>
- [長神 2009] 長神風二, 岡本真, 佐藤亜紀, 佐藤亜紀子 学術情報の自由な集いが生む新たなつながり 第4回 ARG カフェ@仙台”, 情報管理, Vol. 52, No. 7, 2009,
<http://joi.jlc.jst.go.jp/JST.JSTAGE/johokanri/52.426>.